

地元のことを知る旅
車窓を楽しむ路線バスの旅 勝01

京成本線と東葉高速鉄道の勝田台駅から出る路線バス<勝01>が、我が家と最寄り駅を結ぶ路線になっている。会社勤めをしている頃には、国道16号線が渋滞するので所要時間が読めず、あまり好きではなかった。しかし通勤しなくなってからは、時間を気にする必要がないせいか、周囲の景色を楽しみながらひとときを過ごせる余裕が出てきた。さらに、高度成長期を過ぎたせいか、道路事情が改善されたせいか、国道の渋滞もさほどひどくはなくなった。

バスの窓から景色を眺めながら車内のアナウンスを聴いていると、「あれ、何故こんな地名なんだろう」と思うようなバス停がいくつも出てきた。

一度、わかる範囲で調べてみようかなと思っている内に、もう十年以上経ってしまった。

ゆっくりと地図を見ながら車窓を眺めてみた。そして疑問に感じた所や興味を感じた所へは改めて、車や自転車や歩きで何度か出かけてみたりした。題して「車窓を楽しむ路線バスの旅 勝01」

① 勝田台駅

その昔勝田村と言われていた。昭和43年に勝田台団地ができたことで、勝田台駅が開業した。

この辺りは勝田川に張り出した海拔25mほどの台地状の地形で、勝田村の歴史は古代にまで遡るものらしい。

全国各地で、新しく開発された住宅地にはXX台やXXヶ丘などの響きの良い名前を付けることが流行った時代だったので、またかと思いつつながらその名を受け入れていた。

ところがこの納得は覆った。大正6年発行の国土地理院地形図を見ていたら、現在の勝田台団地のさらに南東の上志津との境界にある台地の終端（現在は八千代市勝田）に「勝田台」という表記があるのを見つけた。明治時代以降はこのあたりは陸軍の演習場になっていたため、演習場の中の地名だったのかもしれない。事実、我が家の近くに「三角町（さんかくちょう）」という町名があるが、これは陸軍演習場内の「三角原」「三角台」という地名が起源だと言われている。

「かち」は崖を意味し「た」は場所を意味する言葉で、「勝田」という地名は地形とも合致する。

勝田台駅を出たバスはマンションの間の商店街を抜けて右（西）へ曲がる。

② 千葉銀行

バスが曲がる交差点の角にあるのが千葉銀行勝田台支店。バスは西へ、国道16号線に向かって走る。

③ 八勝園

台地の西端にある「八勝園」というバス停の名前が何を意味する（何に由来する）ものなのかわからなかった。八千代市の市民の森につけられた名が「八勝園」だということがわかったのは数年前のことだった。そしてその場所を確かめてみたら、南西側にもうひとつ勝田市民の森があることもわかった。

勝田の台地に住む鍛冶屋の又兵衛が自地の松林の中から群集塚を見つけたことから「又兵衛割の群集塚」と言われた。この松林が、のちに八勝園と名付けた市民の森になった。林の中にもいくつもの突起が確認出来るが、これが群集塚。南西の角の三叉路に立つ庚申塔には「千葉・白井・下市場」の三方を示す標が刻まれている。（住所は八千代市勝田台南2-30）

台地から勝田川の谷へ下ると国道16号線に出る。

④ 勝田新入口

左折して国道16号線を南に向かうとすぐに「勝田新入口」というバス停がある。

このバス道路が「勝田への新しい入口」だとすれば、昔の「旧入口」はどこにあったのだろう。

昔は勝田の台地の南端の川沿いに集落があった。川の西岸の横戸村から勝田へ入るには橋を渡らなけ

ればならない。橋のある道が「勝田入口」だったが、国道16号線を作るときにそれまでの里道が壊れてしまった。バス停のやや南にある小道は勝田の崖下を通過して集落につながっているのだから、この道が旧入口だったのだろうか。

バスは崖の下の旧集落や崖の上の新集落を左手に眺めながら、勝田川を渡り千葉市に入る。

⑤ 馬橋

一般的には馬橋という地名は、水害に強い橋として「馬の鞍のようなかたちをした橋」を架けたことによるもの、「湿地帯を渡るために馬を並べてその上を移動して渡った」とされるもの、馬が渡ることが出来るように架けられた板橋など、徒渉地点に付けられた言い伝えが目立つ。さてこの地の「馬橋」はいかなる起源なのだろうか。

国道16号線の馬橋バス停から東に入る細い道がある。下横戸集落の北端を抜けると何本かの道と合流して田圃の中を進んで勝田川を渡る。正面に覆い被さる勝田の高台の上には勝田台中学校がある。この橋が馬橋である。橋の欄干に付けられた河川名と橋梁名の札が剥ぎ取られてしまっていてわからず。帰宅後に調べてみた結果、これが「馬橋」であることがわかった。

現在の河幅はわずかだが、兩岸の田圃の一部も昔は川で、もっと幅のある川だったのかもしれない。その昔、対岸の横戸村から勝田村への道はこの馬橋を渡るルートだった。橋を渡って山に突き当たったところに庚申塔があり、三方の道を示す文字が刻まれていた。左へ志津道を進むと勝田の崖を上る坂道になり、上り切ったところに八勝園がある。幕張・検見川方面から志津・佐倉方面へ向かう道で、このルートが旧の「勝田入口」だったとも考えられる。

ここに馬渡しの板橋があったのか、鞍の形をした橋が架かっていたのか。想像しながら帰った。

⑥ 弁天入口

勝田川と花見川の合流点よりやや下流の花見川左岸に「元池弁天」があり、ここへ入る道の分岐点がある。バス停の名になっている。

横戸元池弁天は大正時代の国土地理院の地形図を見ると弁天橋のほりにあり、弁天池という細長い池が書かれており、池の名は昭和初期の地形図では高台池となっている。

のちに花見川開削工事の進展により、500mほど上流の現在の場所に移った。

さらに遡った江戸時代（天保年間）の花見川開削工事の資料に書かれたものを見ても、花見川の谷に細長く横たわる高台池と名がつく池と弁天社が記されている。

弁天様の歴史をもっと遡って見たかったのだが、残念ながらこれ以上古い情報は見つからなかった。

⑦ 下横戸

弁天入口を過ぎると僅かの距離を走って下横戸になる。現在は千葉市花見川区横戸町だが、江戸時代には横戸村と言った。勝田川西岸に南北に長く広がっており、北端から南端まで約4kmある。大正年間の地図を見ると北部の集落（馬橋への道付近）には「下横戸」と記され、南部の集落には「上横戸」と記されている。古い時代には広いながらもまとまった村だったのだから、国道16号線ができたことで東西に分断されてしまった。

初めてこのバスに乗った時に、下横戸→横戸小学校入口→横戸→上横戸 と進む停留所の順番が気になった。下横戸と上横戸の位置関係にどんな論理が介在しているのだろうか。実際に地図を片手に歩き回ってみてすぐに答が出た。勝田川及び宇那谷谷の上流にあるのが上横戸で、下流にあるのが下横戸。民の暮らしは、「川の流れとともにあり」ということだろうと答を出してみた。

バス停から東へ細い道を進むと、南北に広がる下横戸の集落の中央部に入る。立派な家が目立つ集落の中心に公会堂があり、その隣に天王神社、七福神、天満宮が祀られており、その横に富士講・秩父講の記念碑がずらりと並んでいる。

恐らく国道工事の時に撤去されたものを一カ所に集めたのではないかと考えられる。東側に勝田川に架かるさかえ橋につながる道が真っ直ぐに伸びている。広々とした田園風景で、星空鑑賞には最適な場所のように感じた。

⑧ 横戸小学校入口

明治7年(1874年)に隣の宇那谷村の大聖寺に仮校舎を造って宇那谷小学校が創立。犢橋小学校宇那谷分教場、宇那谷小学校と変遷ののち、昭和14年陸軍用地拡張に伴い現在の地に移って横戸小学校となった。余談ではあるが、この時宇那谷村の住民も移転を余儀なくされて軍事最優先の国策の犠牲になった。横戸小学校は148年の歴史を持ち、時代の極端な変化の中を生き抜いてきた学校とも言うことが出来る。学校がある所は「横戸村字渡戸」と言った。川沿いの地に「戸」「渡」がつく地名が多いが、ここも川の流れと関係しているものと思う。「流れの穏やかな澱み」を意味するか「渡し場」があったことを意味するか。

国道16号線から西へ数分入った所に学校がある。

⑨ 横戸

横戸というバス停には日立物流前という副題が付くようになった。

交差点で国道16号線を横切るのは、都市計画道路勝田台長熊線。千葉市柏井浄水場に接続されている上水道管が埋設されている場所を含むことから、地元では「水道道路」と呼んでいる。また、この水道管を守る目的で、一部区間は大型車両の通行ができない。

古いものが数多く残っている中で、国道16号線と水道道路は新時代の産物である。

⑩ 上横戸

勝田川の支流である宇那谷谷(うなやだに)を遡ったところにある集落が上横戸。

国道16号線ができて、さらに国道の西側に県住宅供給公社等による大規模な宅地開発が行われ、激変した地域ではないかと思う。横戸村の時代の主要道路や里道の残骸が今でも残っており、開発によって分断された場所も、古地図と現地図とを並べてみるとつながりがよくわかる場所が多い。

宇那谷谷に沿って小道を歩くと昔が蘇ったような風情がある。盛り土された国道の縁に建つ明星寺や神明社は、いつもきれいに手入れされている。

⑪ 内山入口

花見川区内山町は、国道16号線の東側の勝田川と宇那谷谷に挟まれた海拔25mほどの丘のような所。大正時代の地図を見ると、谷を挟んで上横戸と向かい合っている対岸の集落に「内山」と表記があるが、谷沿いの集落以外の場所はほぼ樹林で人の気配はなさそうな所。

しかし現在では谷沿いの集落のほかに、高い所には農地と工業系の会社が混在している。集落の南端が国道16号線に接していることから、その場所を「内山入口」と名付けたものと思われる。

「打ち+山」(崩壊した山)または「縁(ふち)+山」(崖がある山)が地名の起源ではないかと言われているが、詳細はわからない。

⑫ こてはし団地入口

「こてはし台入口」の信号を右折して国道16号線と別れると「こてはし団地」の中に入る。

昭和40年代に千葉県によって開発された住宅地で、この地にあった六つの町にまたがるエリアを切り拓いて宅地化した。主要な面積を占めていた犢橋(こてはし)町の名を利用して「こてはし台」という住所が新たにできたが、明治時代から軍隊の演習場として使われてきた原野とその中に残っていた古道が分断された。国道の開通と大規模宅地開発がこの辺りの様相をがらりと変えてしまったのだが、「時代の要請」であったことも事実である。

地名の元となった「犢橋町」の主要集落はここから数キロ南の御成街道(県道64号線)に沿った所にあるので、ここに「こてはし」と冠を付けたのは如何なものかなというのが率直な感想。

国道16号線は海拔31m、冬の夕暮には並木道の樹間に日没の富士を見ることが出来る。バスは右折して団地の中に入ると旧宇那谷谷の底に向かって長い坂を海拔18mまで下って行き

⑬ こてはし第一 ⑭ こてはし第二 ⑮ こてはし第三と進む。

左手に巨大な柏井浄水場を見ながら走るとT字路になる。

⑯ こてはし台中学校

東から来て浄水場に突き当たる道は、水道道路（⑨横戸 参照）。勝田台駅から南行してきたバスがこてはし団地内で右折を繰り返した末に北向きに走るの、再び水道道路に出遭うことができる。

⑰ こてはし第四

長い浄水場の壁を通り過ぎて、こてはし台6丁目の信号を渡ると「こてはし第四」のバス停になる。国道を離れてからここまでは宅地開発で作った道だが、ここから先のバス道路は特筆を要する。旧陸軍演習場の中を走っていた軍用鉄道の軌道の跡で、千葉から来た軌道はこの先で花見川を渡って柏井村に入り、高津・習志野などの主要施設につながっていた。花見川を跨ぐ架橋のコンクリート橋脚がかすかに残っているが、どこにも何も表示されてはいない。我が国の恥ずべき歴史の足跡なのかもしれないが、語り継ぐべきものだとも思うのだが・・・。

⑱ こてはし第五

軍用鉄道の軌跡を辿りながら北上を続けると、西側から「横戸台団地」が広がってくる。コンビニエンスストアがある交差点を渡るともう横戸台団地のみになる。交差する道は、幕張方面から来て、馬橋・八勝園を経て佐倉に通じる古道だった。（馬橋の項を参照）

⑲ こてはし第六 ⑳ こてはし団地

古道を渡ると右側は横戸町の農地、左側は横戸台団地になる。それにもかかわらずバス停の名前は「こてはし」のままになっていて、横戸台の住民には大変失礼だと思う。京成バスのバスプールも兼ねている終点の「こてはし団地」バス停も、横戸台団地の中にあるという結果になっている。「こてはし第六」は「横戸台第一」と改め、「こてはし団地」は「横戸台団地」または「横戸台車庫」と改めるのが妥当ではないかと常々思っている。終点の前の道は、花見川の土手にある横戸台緑地に突き当たって行き止まりになる。土手を少し下ってみると、冬場ならば枯れ草の間に軍用鉄道の遺構を見ることが出来る。花見川開削の歴史探訪なども合わせると、面白い散策が出来る場所だ。

以上

こんなローカルなバス路線の旅を書いても、誰が読んで面白いと思うだろうか。ここに住んでいない人にとって興味も関心もないことだろうが、自分自身の学習のまとめとして書いておくことにした。

身近な場所のあたり前な景色が、実は意味ありげなもの的一部分だったりすることがある。遠くへ旅行に出かけられない時には、近くを歩いて見ると意外な発見がある。



